

図書 紹介

感染爆発 鳥インフルエンザの脅威

マイク・デイヴィス（カルフォルニア建築大学）

柴田裕之・斉藤隆央訳

発行：榊紀伊国屋書店（出版部）／150-8513 東京都渋谷区東3-17-7／

TEL 03-5469-5919／A 5判／246頁／価格1600円（税別）／2006年3月9日発行

インドネシアで鳥インフルエンザ(H5N1型)による37人目の死者が確認され、鳥インフルエンザの人への感染は依然としておさまっていない。2003年以降2006年6月までの死者は世界（ベトナム、インドネシア、タイ、中国、アゼルバイジャン、エジプト、トルコ、イラク）で128名、致死率57%に達している。

著者は都市論を主とする社会批評家でもある。本書ではインフルエンザがどういうもので、それがどう広がり、どのような被害を及ぼしてきたかを解説し、新しいインフルエンザウイルス亜型が異種間で急激に進化し、毒性を強め、世界的に伝播しやすくなった原因として、①「家畜革命」による工場式の大規模家禽・家畜飼養の導入 ②膨大な数の人や物のグローバルな高速移動や接触実現 ③巨大な都市やスラムの出現の3つを挙げている。

本書の構成は、ピエタ（はじめに）、下記の12章、西年（おわりに）、訳者あとがき、新型インフルエンザ簡略年表と原注（参考文献334）となっている。

- 1 進化の高速車線
- 2 貧困が拍車を掛ける
- 3 間違った教訓
- 4 香港の鳥
- 5 ややこしい話
- 6 パンデミックスの不意打ち
- 7 魔の三角地帯
- 8 疫病と金儲け
- 9 絶望の淵
- 10 国土「非」安全保証
- 11 構造的矛盾

12 タイタニック・パラダイム

その内容は、1章では、A型インフルエンザは凶暴で危険、進化のスピードは宿主の100万倍、感染して「再集合する」ウイルスなど、2章では、細菌の重複感染をもたらすインフルエンザ、食糧難や他の病気とパンデミックとの関連など、3章では、1918年のパンデミック、1947年の感染爆発と1957年のアジア風邪、香港風邪（1968年）の「玉虫色」の遺産、豚インフルエンザの脅威と予防接種など、4章では、3歳の男の子を襲ったウイルスの特定、感染経路はどこに、160万羽の全家禽の殺処分などである。次いで5章では、「破滅の保全原理」と西アフリカで起きたこと、広東省で何が起きているか、H5N1ウイルスの感染爆発など、6章では、「得体の知れぬ感染症」2003年、SARSの「犯人探し」など、7章では、「広東省」そして近代養鶏場へ、オランダの養鶏場での殺処分、ある獣医の死—ヒトからヒトへの疑い、養豚場でのウイルス騒ぎ、「魔の三角地帯」の出現と秘密主義など、8章では、CP社の発展と政界への賄賂、暴かれた「病気の流行」、タイでの「鳥コレラ」、感染爆発は終息したかに思えたが・・・などである。また9章では、嵐の前の静けさ—謎の招待に迫ったが・・・、飼い猫やトラまでが発病など、10章では、インフルエンザ対策の遅れ、ワクチンの慢性的不足、バイオテロとインフルエンザ、「頭脳流失」といびつな製薬会社、パンデミックが始まったたら対応できない、1918年の状況と変わらないなど、11章では、インフルエンザ・ワクチンは「利益」が上がらない、汚染されていたワクチン製造工場とFDA、タミフルの不足とワクチン政策の大失態など、12章では、スラムがインフルエンザウイルスの進化の温床、経済のグローバル化に見合う国際的公衆衛生制度がない、ワクチンと抗ウイルス薬が不足する地域などが主なサブタイトルである。

本欄では、インフルエンザについて「インフルエンザ危機（クライシス）」（河岡義裕著）を34巻3号で、「感染症は世界の歴史を動かす」（岡田晴恵著）を34巻7号で紹介した。この特性の強いN5H1型の鳥インフルエンザが人型に変異するのは時間の問題であり、この時間を短縮させ、危機を招いているのは、我々人間の仕業であり、経済優先の国策や大企業の姿勢との指摘など反省させられる点も多い。

（学会事務局）

